

特 116

44

彦田川文海講演

三大英雄の遺訓



始



手116  
44



三大英雄の遺訓  
宇田川文海講演

私も年をとりましたので、近頃は、頭が悪くなり、耳が悪くなり、歯が悪くなり、聲が悪くなり、唇はもとよみ、喉が詰ってある。記憶は悪くなる、とても満足なお話は出来ませんが、折角の御依頼でございます。いまから、好きな近古史談の一端、乃ち信長、秀吉、家康、此の三大英雄の遺訓に就いて、少し申し述べて見たいと思ひます。

承はりませぬ。當會には、木谷蓬吟君がお話をなさるさうですが、御承知の通り木谷君は、近世研究の權威で、江戸時代の文化にお詳しい、随つてお話もやわらかい。譬へて申して見ますれば、木谷君のお話は、揚きたての餅のやうに、ふうわりしてをり、私の話は、かた餅のやうで、ごつ／＼してをり、揚きたての餅のやうにうまきはありませんが、かみしめてみれば、少しは味があるかも知れません。どうぞそのおつもりで、暫時御静聽を願ひます。

誰でも能く、人の手本として、聖人、賢人、君子、忠臣、孝子、貞女、烈婦といふやうな人を挙げますが、あまり英雄豪傑を挙げません。たまたに挙げても、忠臣孝子の手本として、楠公父子、新田義貞、小松重盛といふやうな人を挙げて、織田信長や、豊臣秀吉や、徳川家康のやうな、純英雄は挙げません。私の考へるに、現代の社會、今日の日本には、聖人、賢人、君子、忠臣、孝子も、もともと

大正  
15.12.7  
内交

り必要でありませんが、英雄、豪傑は、尤も必要ではありませんまいか。何故と云ふに、現代の社會——今日の日本は、元龜天正の時代のやうな、戰國亂世ではありません。けれども、平和の戰爭の世界の一國として、立つてゐるのであります。今日の平和の戰爭は、昔の戰爭のやうに矢玉鐵砲玉の打合ひはいたしません。算盤珠の弾き合ひをします。若しも此の平和の戰爭に敗れば、日本は世界の一國として、立つてゐる事が出来なくなりません。此う考へて見ますと今日の日本に必要な人は、賢人君子よりむしろ英雄豪傑ではありますまいか。私は此う云ふ考へからして、近來筆にも舌にも、多く近古の英雄の傳記を述べる事にいたしてをります。中の島の豊國神社で、月に二回、豊公事蹟の講演をいたしますのも、一面は豊公の功徳を禮讚し、一面は豊公の價値を宣傳する爲めでありませぬ。

近來盛んに世に行はれてゐる、武藤山治君の著、實業讀本の序に、維新以後の日本は、外形的の文明を得る爲めに、大なる内面的の犠牲を拂つてゐる、それは古來吾邦の武士の間に存在した、武士道を失つたのである。私は實業精神を説いて、此の欠陥を補ふのである、と言つてゐられる。又近日森下博君から、西郷南洲先生遺訓を贈られました。其中に、左の一節が見出されました。

徳川氏は將士の猛き心を殺ぎて世を治めしか其今は昔時戰國の猛士より猶一層猛き心を振起さすは、萬國對峙は成る間敷也。

前に擧げた、武藤君の御説も、南洲先生の遺訓も、私の想ふ所と、異曲同調であります。それから尙一言申し試みますが、此の會の名の、智惠の輪は、蟻通明神の古事から取つて、智識を求めると云ふ意味で、有るかも知れませんが、智識を求めるとは、善い事には相違ありませんが、智ばかりあつても、仁と勇とが之に伴はなければ、完き人とは謂はれません。昔の英雄には此の三徳を兼ねてゐる

人が多しから、それにつけても、古英雄の話をするのは、善い事であると思ひます。西郷南洲先生遺訓の中に、先生は此う言つておられます。

人智を開發するとは、愛國忠孝の心を開くなり。國に盡し家に勤むるの道明かならば百般の事業は従つて進歩す可し。

先生は、智仁勇兼備とは言はれない、國を愛し、君に忠を致し、親に孝を盡す、此の仁と勇との心を開くのが、智であると教へられたのであります。以上の武藤君西郷先生の御説に因つて、私が平生保持してゐる、英雄崇拜の信念を、一層強固にする事を得ましたので、今晚も諸君に向つて、喜んで勇んで、三大英雄の遺訓に就て述べるのであります。

本題に入る前に、今一言申しておきたい事があります。三大英雄の遺訓を申しましたが、信長、秀吉、家康の三雄が、世に遺し、人に教へる爲めに、論として、説として、考へて組立て、作つたものでも、述べたものでもありません。只自分の体験から出た、所感を、或る時、或る場合、或る人に對つて、漫然と断片的に言はれたものであります。併し私は、却つて是が貴いと思ふのであります。彼の聖典、聖書として、世に貴ばれる、論語や新約も、孔子や基督の其体験から出た、断片的の坐話や立談を、弟子が聞き書きしたので、佛敎の御經のやうに、釋尊の説法を集めたものとは違ひます。けれども二千年後の今日、一言一語、尙生命を存し、世を教へ人を誠むるに、廣大無邊の力をもつてをります。三大英雄の遺訓も亦、それに近いものであります。どうぞ其思召で御静聽を願ひます。

### 織田信長の遺訓

第一は、信長の遺訓に就て申し述べます。御承知の通り信長は、明智光秀の爲めに弑され、五十に足らないで、早く世を去つた人でありますから、随つて書いた物も、曰つた言も、あまり多く残つてゐないやうであります。私の目に觸れたもので、やゝ纏つたものは、秀吉が藤吉郎時代、墨股の城を守つてゐた時に、贈つた制書。足利義昭に呈した諫書。越前の國衆に與へた捷書。佐久間信盛に與へた折檻書。秀吉の妻のおねに與へた消息。安土の額の、さとり繪の歌ぐらゐのものであります。私はこの内の一つの、さとり繪の歌について、申し述べるのであります。

此の額は、信長が安土の城に居た時、居間の長押に掲げさせ、近習の人々に示したものであります。信長の没後、孫の織田貞幹が之を寫して、尾張の國の寶山寺といふ寺に納めたが、今に猶其寺に保存されてある、と云ふことであります。其繪は狩野永徳の筆に成つたもので、一人の男が立てをり、それが胸を出して、右の手に棒を突き、左の手で、箕を高くさし上げ、その足下に、篋が一本おいてあり、その側に蚊帳が釣つてあります。この繪は、その頃世に行れた、さとり繪(うた繪とも云ふ)であります。即ち

「むねひろく、氣をすぐにもち、へらをして、かせげ(蚊防)ばみをも、もちあぐるなり。」  
この歌の意を、繪に描いたのであります。是を畧解すれば、人は、胸を廣くして、棒のやうに、心を眞直ぐに持ち、べら(なまけ根性、べら坊、穀つぶし)べらはへつらひといふ説もあります)を捨て、かせげば(蚊帳は蚊を防ぐもの)おのづから、身(箕)をもちあぐるもの(立身出世する)といふかくし言葉、即ちさとり繪であります。繪は前に述べた通り、永徳でありますが、書は誰がかいたか分りません。是から此のさとり繪、歌繪の意を、信長の遺訓として、評釋を試みます。

初句 胸ひろく……人は胸がひろく、心が大きくなつては、物は成せません、立身する事は出来ません。胸廣くとは、能く人を容れることであります、尙言へば、能く人の言ふことを聴くことであります。昔も今も、成功した人、立身した人の多くは、胸をひろく、心を大きく持ち能く人を容れ、能く人の言ふことを聴いた人であります。信長は、能く人を容れた人でありまして、人を用ひるのに、門閥を問はず、生國を問はず、その取立てた多くの大名の中で、最も優れた人物、中國の探題に任せられた、羽柴秀吉は、小者(草履取)から、關東の管領に補せられた、瀧川一益は、足輕(鐵砲打)から引上げたのであります。信長は又、おそろしく我の強い人のやうですが、なか／＼能く人の言ふことを聴いた人であります。彼の一世一代の合戦であつた、桶狭間の戦ひに四千の小勢を以て、四萬の今川勢に討勝ち、義元の首を獲たのも、築田出羽守の諫言を聴いたからであります。信長は尤も能く、新參鄙賤の木下藤吉郎の云ふ事に、耳を傾けました。甫菴の太閤記に、此う云ふ事が書いてあります。「才發な者は、とかく人の嫌がるものである。殊に秀吉は人に越えた才發で、出過ぎた人であるから、何處へ行つても誰も用ひなかつた。然るに信長は、胸が甚だ廣かつたので、秀吉の人に優れた才を愛し、之を寵用して、事大小となくその言ふことを聴いた、實に明君である。」と。信長は十六歳の時に家老達に向ひ、「君たるの第一肝要の事は、人を知り、人を用ふる事であると思ふ、」と言つた事があります。信長が尾張半國から起つて、五十に足らずして、麻の如くに亂れた日本を斬り從へ、布武天下の望みと、天下速成の功の、七八分を成就したのは、胸が廣く、能く人を用ひ、人の言ふ事を聴いたからであります。「西郷南洲先生の遺訓」にも、此う言はれてあります。

古より君臣共に己れを足れりとする世に、治功の上りたるはあらず。自分を足れりさせざるより

下々の言も聞き入るゝもの也。己れを足れりとすれば人己れの非を言へば忽ち怒るゆゑ、賢人君子は之を助けぬなり。  
南洲先生の遺訓も、信長の遺訓も、異曲同調であるのがありがたい。諸君も、胸を廣くして能く人を用ひ、能く人の言ふ事を聴いて、立身成功……稼いで身をもち上げられん事をお勧めいたします。  
明治天皇御製。

あさみどりすみ渡りたる大空のひろきをおのが心ともかな  
二句 氣をすぐにもち 心を正直に持てと言ふ事でありませぬ。正直は人間の最上の徳であります。何程の才智があつても、正直でなければ、善人ではありません。尙言へば、正直でなくつて才智があれば、それこそ最大の悪人であります。信長は非常な權謀術數家（うそつき）のやうに謂はれてをりますが、否、戰國の大將でありますから、或る時、或る場合には、權謀術數も用ひました、けれども根は正直な人であります。自分が正直ですから、人を用ひるのでも、才智より正直を採つたのであります。秀吉（木下藤吉郎）を採用したのも、第一はその律義な性質を見込んだのであります。信長は森蘭丸を寵用しました。蘭丸は固より信長の小姓の中で、最も智勇の優れた者でありましたが、信長の見込んだのは、その正直律義にあつたのであります。信長は常に刻み鞘の小刀をさしてゐました。一日小姓共に向ひてその小刀をしめし、「この鞘の刻みは何個なるか、當てた者にこの小刀を取らせる」と云つた。小姓達めい／＼その數を言つたが、一人も當らなかつた。其席に蘭丸も居合せたが黙つてゐたので、信長之に向ひ「阿蘭は何故當てぬか」と問ふたら、蘭丸は之に答へて「私は曾て之を數へて、存知てをりましたから、申しませぬ」と言つたので、信長その正直を感じて、一層寵愛し

たごいふことでもあります。甫菴は太閤記に、信長が人才を採用する方法を稱へて「いづれも素直にして正しく武勇の道大に、士の格自然におさ／＼しきものであつた、」と云つてをりますが、始めに述ぶる如く、信長が正直な人を愛したのは、自分が正直であつたからであります。人は何よりも正直を本としなければなりません。

明治天皇御製

人はたゞまことの道をまもらんたかきいやしき品はありとも

三句 へらへらすて……へらをへつらひと説く人がありますが、私は、篋、即ち飯をつぶす棒、俗に云ふへら棒、穀潰し、なまけ者、なまけ根性と説くのであります。信長は自分が大勉強家でありませぬから、へら……遊惰者（なまけもの）が大嫌ひでありました。それでへらをすてよと教へられたのであります。信長の父の信秀は、おそろしい嚴格の人で、信長の吉法師時代に、朝から晩まで間斷なく兵法軍學を教育いたしました。一つはそれが爲めでありませぬ。治に居て亂を忘れずとは、信長の事でありませぬ。戰爭のない時は、野狩、山狩、川狩などをして、一日も遊惰に暮らす事はなく、夜は又、伽の者を集めて、話をさせて聞き、又、自分も話をして聞かせ、知識の交換、即ち耳から學問をしたのであります。それに又非常な早起きで、起きるとすぐに馬に乗るので、表へ出て、「誰かある」と呼ぶと、例も「ハア」と答へて出て来るのは、小者の藤吉郎でありました。信長が秀吉に目をつけたいのは、第一秀吉の早起し勉強にあつたのであります。信長はやゝもすれば人を罵つて、おほゆるやまと云つてをります。是は則ち、なまけものへらと云ふことでもあります。信長もへらをすてよ、一生の間天下速成（てんかどり）に勉強したのであります。諸君も身を立て、事を成すには、信長におほ

ぬるやまと言はれぬやうにへらを捨て勉強しなければなりません。四句 かせげば身を……かせげば人間は、へらなまけごろをすて、晝夜一心にかせがなければならぬ。然うすればどんな者でも、身を立てる事が出来る。信長は此う云つて人に教へたばかりではありません。前に述べた通り吉法師から右大臣に進むまで、尾張半國の主から、天下を取るまで、尙言へば、物心を覚えて(六七歳)から、死ぬ(四十九)まで、晝夜間斷なく、かせいだ人であります。又かせがなければ彼のやうな大業は成せません。

「人生五十年、化轉の内をくらふれば、夢幻の如くなり。一度生を受け、滅せぬものゝあるべきか。」

是は信長が平生から最も好んでゐた「敦盛」の曲舞の一曲で、桶狭間出陣の際にも、此の曲をくり返して舞つたといふ、名高い話のこつてをります。信長は又好んで、

「死なうは一定、忍び草には何をしよう、一定語りおこす夜の」

といふ小歌を詠つてゐたと云ふ。是に因つても、生死を念頭におくことなく、唯だ命のある限りはへらをすて、かせいで、天下速成(日本統一)の功を成さうといふ、その精神が能く現はれてをります。諸君も信長に倣つて、へらをすて、かせぐならば、亂世の時代でありませんが、天下速成(日本統一)といふやうな事は出来ませんが、身もちあぐる事、即ち立身出世はきつと出来ます。

五句 もちあぐるなり……もちあぐるは前の句の終りの、身をもの詞を受けたのであります。此句の意は、冒頭にも申しました通り、……胸をひろく、氣をすく(正直)にもつて、へらをすて(なまけ心を去り)かせぐ(勉強する)ならば、人は誰でも身もちあぐる(立身出世する)ことが出来ること

教へられたのであります。次には秀吉の遺訓について、申し述べます。

### 豊臣秀吉の遺訓

秀吉の遺訓として、左の七ヶ條が、世に傳へられてあります。

- 一、よくをはなるべし。
- 一、女に心ゆるすな。
- 一、人と物を争ふな。
- 一、朝寝するな。
- 一、何事も人なみになれ。
- 一、身の行末をつゝしむべし。
- 一、物にたいくつするな。

此の秀吉の遺訓も、前の信長の遺訓と同じ事で、晩年になつてから、近習の者に向ひ、自分が若い時から経験した事を、心得のため言つて聞かせたのであります。

其一、よくをはなるべし。

人間はもとより凡を生きとし生けるものに、慾のないものはありません。そして慾は大切なものがあります。慾がなければ身が立たぬ、といふ諺の通り、人間が立身するのも、成功するのも、此の慾があるからであります。けれども、只いつも慾張つてゐるばかりでなく、時としては慾をはなれることを仕なければ、大きな立身成功は出来ません。之を現代的に言へば、利己だけでなく、利他もやら

なければなりません、自分の慾を満せるばかりでなく、人の慾も満せなければいけません。およそ秀吉がらむ慾の深い、否、慾の大きい人はありません。一例を申しますれば、秀吉は信長に仕へて、小人から進んで、中國の探題にまでなりましたが、其様な事では満足しません。信長の没後、日本を統一して、關白太政大臣に成り、位人臣を極めました、それでも満足しません、朝鮮を討ち、支那を征し、大明王に成らふとしましたが、天が年を假さなかつた爲めに、その慾を果す事が出来ませんでした。此様に慾の深い、慾の大きな人でありましたが、復能くその慾をはなれた人、即ち人に能く慾を分けた人でありました。信長に仕へて、何程か祿を貰ふやうになりましたから、その祿の多くは曾て交りを結んだ、尾張美濃の野武士、蜂須賀稻田等に分けてやり、自分はいつでも貧乏してゐました。この慾をはなれて、野武士を扶助したため、彼等の助成を得て、一躍して侍大將に成り、墨股の城を預けられ、藤吉郎より筑前守に進んで、織田方の名將と呼ばるゝに至り。又、舊主信長の弔ひ合戦をする爲め、姫路より出陣するに臨み、今度の戦ひは、光秀と秀吉の、天下分目の合戦であるから敗れば生きて此城に還る事はない、と云つて、城内にあるだけの、金銀米穀財寶を、一文一粒一品も残さず、悉く部下の將卒に分け與へた。山崎の合戦に、想ふまゝの勝利を得て、天下を取る基礎を造つたのは、一つは此の慾をはなれた功に因る。相手の光秀は秀吉の反對に、慾にはなれる事が出来ず安土の城の金銀財寶に目が眩んで、一番大事の大將の明智光春に、之が番をさせたのが、山崎合戦にもろく敗れた、一つの原因であります。秀吉は諸將の勳功を賞するに、祿を惜まなかつた、蒲生氏郷に、會津の百萬石を與へ、徳川家康に、關八州を與へたのも、此の例であります。秀吉は又、天正十六年に、新に金銀の貨幣を鑄造し、翌十七年に、金貨を四千九百枚、銀貨を二萬千百枚、都合二萬六

千枚、其金高三十六萬五千兩を、公卿を始め一門一族諸將に分配した事があります。是に因て人心を買収したと、言へば云へますが、とにかく慾をはなれなければ出来ない事であり、秀吉が卑賤より出て、天下を取つたのも、日本を納めたのも、一は慾をはなれる事を知つてゐたから、言ひ換へれば、自分の慾を他人に分つたからであります。

南洲遺訓にも此ういふ事があります。南洲先生、嶋に流されてゐた時、島民の子弟を集めて「お前達は、一家のものが、どうすれば睦まじく暮すことが出来るか、その方法を知つてゐるか、」と尋ねて、自ら之に答へて、「一家の者が睦まじく暮すのは、慾をはなれるに在る」と教へてゐられます。如何にもその通り、親子兄弟夫婦が、互ひに慾にはなれるならば、風波の起る憂ひはありません。否、一家ばかりではありません、會社でも、銀行でも、工場でも、雇ふ人雇はれる人、使ふ人使はれる人互ひに慾をはなれ、ば、問題はあります。最後に一言を重ねておきます、人は慾を遂げようと思ふならば、立身成功しようと思ふならば、秀吉に學んで、慾をはなれる事を知らなければなりません。其二、女に心ゆるすな。

男女の關係が昔と變つて、互ひに心をゆるすことを教へられる大正の今日から見ますれば、此の秀吉の言は、時代錯誤のやうであります。今から三百年の昔にさかのぼつて見ますれば、その時代の男女の關係は、所謂男尊女鄙で、主従も同様、女子にはいさゝかのしつけはありましたが、教育といふものがありせんから、概して智識は劣等で、迂濶に心を許すことは出来ません。孔子が女子と小人は養ひ難しと曰つたのも、分り好く言へば、女に心ゆるすなであります。夫婦別ありの教も、是に近い意味をもつてをります。徳川時代に澤山のお家騒動がありますが、その原因の多くは、殿様がお

てかけに、心をゆるしたからであります。秀吉の五妻と云つて、五人の奥様がありました。心をゆるした、否、たがひに心をゆるし合つたのは、北の政所おねの方だけではありません。鶴松と秀頼の、二人の若君まで設けた、淀殿も、寵愛はしましたが、心はゆるしません。それゆゑ、五人の夫人はありましたが、秀吉の生前は、豊臣家の閨門は平和を保たれておりました。終に尙一言を添へておきます、女子教育の盛んな、大正の今日でも、教育ない女、教育があつても、虚栄心の強い婦人には、迂濶に心はゆるせません。然ういふ婦人に心をゆるした結果は、毎日の新聞に、悪いたねが蔭れてをります。

其三、人と物を争ふな。

秀吉は信長に、出過ぎ者と云はれたらぬでありますから、人と物争ひをした人かと思はれますが、出過ぎた事を言つたり、仕たのは、自分を知られるために、信長に對してだけではありません。他人に對しては、些細の事で物争ひして、その人の感情を害するやうな事はいたしません。その證據は、松平之綱の家に奉公してゐた時、朋輩の者に妬まれて、盗人の汚名を被せられた事がありました。秀吉は主人之綱に對して、その讒言した者と、對決して、身の明りを立てる事は、望みましたが、その人とは争ひませんでした。又、信長に仕へた後も、福富平右衛門所持の、金龍の彫刻の笄の紛失した際、或人に盗人の冤罪を被せられましたが、其人に對しては一言の争ひもせず、機敏なる働きに依つて、その笄の盗人を捕へ、主人信長の前に引立つて、立派に身の明りを立て、をります。秀吉は此通り、盗人の汚名を被せられてさへも、成るべく人と争はぬ方法を取つたからであります。まして些少の事で、人と物争ひをしなかつた事は、言ふまでもありません。けれども、その當時勇士の名のあつた、三木牛之助が「人はたゞさし出ぬこそ好かりけれいくさのみはさきがけをして」といふ歌をよんだ

といふことを聞いて、秀吉は笑つて、おれならば此うよむと云つて「人はたゞさし出るこそ好かりけれ、いくさに出てもさきがけをして」と、短冊に書いたといふ話がありますが、前にも云ふ通り、秀吉は、平生は人と物を争はなかつたが、此歌の通り、いくさに出ても、さきがけをしたばかりか、人のいやがるしんがりまでして、度々大功を立てたのであります。尙申しますれば、秀吉は小さい事はかりでなく、大きい事でも、成るだけ人と物を争はないやうにいたしました。戦争でも成るだけ避けるやうにして、四國の長曾我部でも、九州の島津でも、その降参を許し、家康の如きは、その母を人質に贈つてまでも、和睦をしたのであります。

今日は競争に依て、人でも國でも、進歩發達するのでありますから、眞の競争は結構ですが、秀吉の誠めた、物争ひはいけません。今日の政黨者流のやつてゐる事は、競争ではなくて物争ひ、みにくい、物争ひではありますまいか、否政黨に限りません、學者でも、實業家でも競争は結構ですが、醜い物争ひは慎まねばなりません。孔子は其争ひや君子なり、と曰つてをりますが、競争は君子の争ひで、物争ひは小人の争ひであります。

其四、朝寝するな。

秀吉の早起であつた事は、前の信長の遺訓の中にも述べましたが、信長が天下速成の功を遂げ、秀吉が日本統一の業を成したのは、一は二大英雄が朝寝をしなかつたからであります、早起きをしたからであります。朝寝をしない人、即ち早起きをする人は、時を惜み、時を尙び、時を用ふる人です。人が神から與へられたもの、中で、一番貴い物は時であります。人が一代の中に、大事業を成すのも、大發見を成すのも、大創造を成すのも、大著述を成すのも、大富豪に成るのも、時の力であ



ります。其人が、時を惜み、時を貴び、時を積み、時を用ひたからであります。約めて言へば、蒙昧野蠻の世界が、今日の文明開化の世界に進歩發展したのも、人間が善く時の力を用ひたからであります。今日勤儉といふことをやかましく言ひますが、勤とは、時を有益に用ふる事、儉とは時を無駄に費さない事であります。其國民が勤儉なれば其國は興り、其家人が勤儉なれば、其家は榮へます。實に時は寶であります。時は金といふ諺がありますが、金は失つても取返す事が出来ますが、時は失つたら、取返す事は出来ません。此の大切な時を惜み、時を貴び、時を積み、時を用ふる、其の第一のはたらきは、朝寝をしない事即ち朝起きをする事でありますから、お互ひに此の秀吉の遺訓を奉じ勤儉を實行して、大は以て國を興し、小は以て家を榮へさす事に、心がけねばなりません。

其五、何事も人なみになれ。

秀吉のやうな、人なみすぐれた智慧をもつてゐる人が、人なみになれと教へたのは、殊に味ひのあることでもあります。人なみとは、おほよそ誰にでも出来る、誰にでも出来るといふ程度であります。此の時代の士の身分から申しますれば、人なみの士と言へば、槍を立てさせて歩くやうになる程度でありましょう。それが容易に成れない。生涯働いて、歩卒の身分で終る者が多い。武藝の上から言へば、目録、免許、皆傳といふやうな、階段があります。人なみの藝と云へば、目録を得る事でありましょう。より以上、免許、皆傳を得る事は、容易ではありません。槍一筋の武士を越えて、侍大將に成る。目録を得た上に、免許まで進む、是には勉強といふことも、もとより大切であります。之に天分といふものが加はらなければ、むづかしい。それにも拘はらず若い者は、働かさへすれば誰でも侍大將に成れる、努めさへすれば誰でも、免許皆傳が得られると、過分な望をもつ者が多い。甚しき

になること、働かぬせず、侍大將に成れると思ひ、努めもせず、免許皆傳が得られるといふやうな空想を抱く者があるので、分を知れ、程を辨へる、人なみの人になれと、誠められたのである。秀吉が、人なみの人に成る考へをもつてゐた事は、後に述べます。

其六、身の行末をつゝしむべし。

一日の計は晨に在り、一年の計は春に在り、一生の計は勤に在り、一家の計は身に在り。是は誰でも言ひ、誰でも知つてをりますが、さて行ふ人は少ない。やゝもすれば身の行末を忘れ、若い時をかゝと過し六七十に成つて、困難する人が多い。それで豊公は、誰でも知つてゐる事を舉げて、殊更に訓へられたのであります。此う言つたら或人は、秀吉それ自身が没後間も無く家康に家を滅されたのは、何うかと言ふかも知れませんが、秀吉ぐらゐる身の行末をつゝしむた人は少ない。けれども天、豊臣の家に幸ひせず、とても云ひましようか、秀吉の死が十年早かつた。身後の事を托しておいた、大事な人々、前田利家、淺野長政、加藤清正等の、股肱羽翼の人々が、皆早世をした爲めに、事志と違ふたのであります。身の行末をつゝしまなかつたのではありません、身後の計をたてなかつたのではありません。

其七、物に退屈するな。

秀吉の七訓の中で、第一の、よくをばなるべしと、この退屈するな二訓が、最も大切であります。學問でも事業でも何でも彼でも、退屈しては成し遂げられません。ところが、日本人には、退屈する物に飽き安い、悪い癖があります。どうして此の悪い癖があるか、躰格の悪いせいで、滋養分の少い物を食ふせいだなど、いろいろの説がありますが、とにかく退屈する、物に飽き安い、その證據に

は、日本人ぐらゐ、居睡りをし、あくびをする國民は、他に類がないさうです。その一例に、私の心安い人が、或る米國人の博士に雇はれて、毎日午前の八時から十二時まで、博士の口譯を筆記するのが、仕事であります。然るに此の博士は、七十を越へてゐるのに、長の年月、仕事をしてゐる間に、只の一度もあくびを仕た事がなく、たまに其書記があくびをする、〇〇さん、お勞れですか、と言はれるので、その度ごとに背中から冷汗が出る思ひ、どうぞしてあくびを仕たくないものと思ふが、やゝもすれば出るので、いつも苦んでゐると、話された事があります。又、是は世界戦争の頃であります。名古屋の陶器會社で、降伏の獨逸人を、七十人、日本人の職工の、倍の給料を拂つて使つて見ました。最初は高いものゝやうに思つたが、仕舞には安いものに成つた。日本人の職工は、朝から午までは、元氣よく働くが、午後になると、退屈して、飽きが来て、話をする、煙草を飲む、あくびをする、居睡りをする、仕事が始まらないが、獨逸人の職工は、それと反對で、午前の八時から、午後の四時まで、すこしも變る事なく、話もしなければ、煙草も飲まず、コッ／＼と働きつゞけるので、平均して日本職工の倍以上の仕事をする事に成つた、といふ事でもあります。今日の世界は、産業的、平和的の戦争を、二六時中繼續してやつてゐるのであります。物に退屈せず、飽かず、あくびをせず、居睡りをしない白人を相手にして、物に退屈する、飽きる、あくびをする、居睡りをする日本國民が、果して永遠の勝利を得る事が出来ましようか、お互ひに奮發して、物に退屈しない國民にならなければなりません。能く人が、秀吉程立身の早い人は、無いやうに言ひますが、秀吉が信長に仕へて、小人より進んで、侍大將に成るには、十五六年の月日を要してをります、その永の年月の間、少しも退屈の色を見せないで、而も他にすぐれた奉公を、仕つゞけにつゞけて、信長に知られ、擧げら

れ、用ひられたのであります。秀吉が猶藤吉郎時代の事でありませんが、一日のこと詰所に、明輩の若者が四五人集つて、各々その志を述べた、一人が曰く、予は一國一城の主たらん事を望んでゐると、一人又曰く、予は百萬の富を蓄へ、百歳の壽を保つて、あらゆる榮華をつくさん事を望んでゐると、其時秀吉は隅の方に坐つて、黙つて、何事も言はなかつた。人々之に向つて、木下、貴公も何か望を云へと、口々に促したが、秀吉は漸くにして口を開き、「自分は今幸ひにして、主公より祿百石を拜領して居る、何卒此上に、尙百石の加増を得たいものと、それを望んでゐる、」と眞面目に答へた。友人共之を聞いて高笑ひ、「棒程思つて針程といふ、世の諺もあるのに、それは餘りに小さい望ではないか、」と言ふと、秀吉は頭を振り、「イヤ、決して然うでない。各方の言ふ所は、皆口で言ふだけの事で、實際には成らぬ事である、予の望は然うでなく、必ず成るべき程の事である。それで勤め方の如何に依て、屹度得らると思つて、日夜工夫を凝してゐるのである。」と云つたので、人々太にその心得の勝れたのに、感心したと云ふ。前に擧げた遺訓の中の、「何事も人なみになれ」「物に退屈するな」の二つの誡めは、秀吉が若い時に於ける、此う云ふ實驗から得たものであります。又、秀吉が苗字を羽柴に改め筑前守に進み、毛利征伐の先手の大將、中國の探題として、播州姫路の城に在つた時、その參謀であつた、黒田孝高が、一日秀吉に向ひ、「立入つた事を伺つて、失禮でござるが、承はる所に因れば、貴殿には、小人として織田殿に仕へ、今日の位置にお進みの由、世にも稀なる御立身、是には何ぞ秘訣でもござるか、後學の爲めお示しにあづかりたい。」と、懇ろに望んだら、秀吉は笑つて、「吾等の立身には何の秘訣もござらぬ、仰せの如く吾等は織田殿に、足輕として仕へ、一心に務めたら、足輕頭に取立

てられ、ありがたい事に存じて、尙一心に務めたら、士分に取立てられ、士分より、槍一筋の侍さむらひ、槍一筋の侍より、侍大將、侍大將より、今日の身分、播州一國を拜領するに至つたのでござる。吾等はツマリ、一の職しやくを興たかへらるれば、一の官に任せらるれば、一の官、それを心の限り、大切に務めたばかり、その他には何事もござらぬ」と云つた。孝高之を聽いて畏まり「是は誠に善き教へを承はつてござる、」と云つて、自ら筆を執つて書留めておいた。その筆記が黒田家の重寶として、今尙大切に保存されてゐると云ふ事でありませぬ。此話は簡短ではあります。昔と今とは、時世が違ひますから秀吉のやうに、天下を統一する事は出来ませんが、秀吉の此の職務に忠實であつた、すぐれた奉公ぶりに學ぶならば、正夫から出て宰相に成る事は出来ませぬ。その近い例は、去年逝去した、加藤高明君に見られるではありませんまいか。加藤君が大學を出て、三菱に雇はれ、段々出世して、札幌の支店長を勤めてゐた時、社長の岩崎彌太郎君が、日本中の支店を巡視して、最後に札幌の支店に至り、事業を調査したところ、すべてが能く整理され、第一の成績であつたので、非常に感心して、當座の褒美として、腰に附けてゐた金時計を、鎖のまゝ、興へた。加藤君は恭しく頂いて、すぐに之を戻し「社長是はお預けいたしておきます、」と云つた。岩崎君怪んで、「何故そんな事を云ふ、」と尋ねますと加藤君答へて「私は尙此の時計を持つだけの、値打がありません、他日持つて宜い時が来ましたら、更に頂戴いたします、」と云つた。岩崎君、その小成に安んじない志に感じて「それならばその時まで預つておかう」と云ふと、加藤君は更に、「社長、今一つお願ひがあります、お互ひに今日あつて明日ない命でありますから、時計の預り證を書いて頂きたい」と云つたので、岩崎君はその注意の周

到なるに感じ、いよ／＼信用を増して、遂に愛女の婿にしたといふことであります。加藤君が、愛知縣の貧乏士族の家に生れて、遂に憲政黨の首領として、内閣總理大臣に進み、同じ尾張の出生からして、第二の豊公と云はれたのも、此の職務を忠實に勤め、小成に安んじなかつたからであります。もしも職務に對して、忠實勤勉ならば、誰でも、豊公の出世、加藤君の立身にあやかる事が出来ます。次は徳川家康の遺訓について述べます。

### 徳川家康の遺訓

家康は七十五までも、長生きをした人、而して徳川幕府は、三百年近くもつゞき、その家も今尙歴然と残つてをりますから、随つて家康の遺訓といふものも、澤山残つてをりますが、其中の二訓と三訓と遺訓の三つだけを擧げて、簡短に申し述べます。

#### 家康の二訓

- 一、上を見な。
- 一、身の程を知れ。

是を家康の五字七字の誠まことめと云ひます。兩語ふたごのこゝろとも、時代相應な、消極的な誠めでありませぬ。此の時代は、士農工商の階級的制度に因つて、世は治められてゐたのであります。而してその四つの階級に上中下がありまして、その分を越へることの出来ない仕組みに、なつてをりますから、上士は代々上士、中士は代々中士、下士は代々下士、農工商も亦同じ組織であります。その中で商はや、自由を得てをりまして、其人の働き次第で、貧乏人が金持になる事が出来ませぬが、それでも株家督といふも

のが定められて、成るだけ變動の少ないやうにしてあります。其時代の祝詞に、「相變らずでお目出度うござります、」といふてをりますが、此の一語が能く此の時代の真相をつくしてをります。此う云ふ風でありますから、上を見たところが、容易に登れません。登れませんから、上を見ると腹が立ちます、不平が起ります。物その平を得ざれば鳴るで、人は不平が起ると、ブツ／＼言ふ、ツイ面倒な事が起りますから、そいふ事のないやうに、上を見るな、身の程、即ちその身の分限を知れ、と誠めて、庶民をして、不平、不満足を起さしめないやうに、誠め教へたのであります。次は三訓について申し述べます。

家康の三訓

- 一、予の未だ志を得ざるや、二字の誠を守る。曰く、  
忍耐
- 一、予の將に志を得んとするや、四字の誠を守る。曰く、  
大膽不敵
- 一、その既に志を得るに及んでや、四字の誠を守る。曰く、  
油断大敵

此の三訓は前の二訓のやうに、一般的に訓誡したものではなく、自分の経験を陳べて、人を訓誡した、實にありがたいものであります。

忍耐 (かんじん しんぼう) (かんじん しんぼう)

忍耐(かんじん しんぼう)が、成功の本である事は、今更云ふまでもない事であります。古より

今に及びますまで、一事を成し、一業を遂げた人に、忍耐をしなかつた人は、恐らく唯一人もありません。その中に就て又、家康ぐらゐ、能く忍耐した人は、めづらしいと思ひます。家康は忍耐の上か。一語を添へて「予の未だ志を得ざるや」と云つてをります。その家康が志を得ざる間は、實に長かつた。家康は八歳の時に、父の忠廣を失ひ、その年から十九歳になるまで、十二年の間、駿河の今川家に人質に取られて、今川義元に對して、忍耐しました。十九の時に、織田信長と今川義元と、戦ひを開き、桶狭間で義元が信長に討たれたので、始めて人質の苦を脱れて、自分の領分の岡崎の城に還つて、やうやく志を得るの機運に向ひましたが、三河の數郡の領主では、獨立する事が出来ません、義元の子息の今川氏眞は、愚將であつて、頼むに足らない事を知つてゐますから、其後は今川家に背を向けて、織田信長と手を握りました。そして信長の爲めに、織田家の大敵である、甲州の武田信玄の、抑えに當てられました。敵の信玄に對して、忍耐したばかりでなく、味方の信長に對しても、長い間忍耐しました。信長の爲めには、妻の筑山殿を殺し、子の信康を殺すまでの、強い忍耐をやりました。敵の信玄が死に、味方の信長が、明智光秀に弑されたので、更に志を得るの機運に向ひましたが、深謀に富み遠慮に長けてゐる家康は、今度は又、秀吉と手を握り、駿遠參甲信五ヶ國の大守でありながら、尙忍耐しました。その忍耐の報酬として、進んで關八州の大守、日本一の大諸侯になりましたが、それでも忍耐して、秀吉の草履を直した事がありました。秀吉の没後、十八年の長い月日を忍耐して、始めて大阪を滅ぼして天下を取り、全く志を得てから、一年もたないで死にました。ツマリ家康は、八歳にして今川家に人質に取られてから、七十四にして天下を取るまで、六十七年の長の月日、忍耐をした人であります。何とめづらしい忍耐家ではありますまいか。その長い忍耐の徳に依つて、

天下を取つたばかりか、徳川幕府三百年太平の基を開き、王政維新の後に至つても、猶徳川家は、公卿家の大華族として、歴然として榮えてをります。忍耐の徳も亦偉大なものと言はねばなりません。此の忍耐家の家康の口から出た、忍耐の語は、實に千鈞の力があります。お互に家康に學んで、あくまで忍耐して、己が従事してゐる業務を、立派に仕揚げなければなりません。

大膽不敵

家康は前に言ふ通り、めづらしい忍耐家ではありませんが、その忍耐家が、夫と正反對の、大膽不敵の語を遣し、それに一語を添へて、「予の將に志を得んとするや、」と言つてをります。家康は、志を得ざる間は、消極的の忍耐を専らとし、その志を得んとするに當りては、積極的の大膽不敵な事を、敢てしたのであります。彼の尺蠖の屈するは、伸んが爲めなりで、即ち、或る時は、忍耐——屈——し、或る時は、活動——伸——し、忍耐——屈——しつゝ、活動——伸——しつゝ、徐々として進展發達したのであります。此の忍耐、活動、屈、伸の両面を備えてゐたのが、家康の眞面目であります。前に言ふ通り家康は、永い間今川義元に、忍耐——屈——してゐましたが、桶狭間の合戦に臨み、今や將に志を得んとするに當つては、大膽不敵の活動——伸——を試みて、敵の丸根の城を攻め、味方の大高の城へ、兵糧を入れて、目覺しい働きを仕ました。信長と手を握つてからも、敵將信玄の上洛の路を塞いで、困難の役を勤めながらも、近郡近國を征略し、最後の味方が原の合戦には、大膽不敵にも、一萬に足らぬ小勢を以て、三萬に近い信玄の大軍と戦ひ、大敗するも尙屈せず、濱松の城を固く守つて、あくまで抵抗し、敵の老雄を驚ろかし、味方の奸雄（家康から見ても）信長をして、頼もしくもあり、恐ろしくもある若者と思はせました。味方ヶ原の戦争には負けたが、家康は、東海道第一の弓

取りの名を博し、大なる志を得ました。信長の死後家康は、更に大なる志を得んとして、信長の二男の織田信雄を援けて……其當時、逆賊明智光秀を誅し、強敵柴田勝家を滅ぼし、上杉景勝と和睦し、信長の三男信孝を殺し、城を大阪に築いて、天下を席の如く巻く勢ひのある……羽柴秀吉と戦ひを開き、而も長湫の一戦に勝を占めて、武威を天下に輝かし、秀吉より和を求むるも聽かず、遂に其の母を人質に取つて、漸く和睦するといふ、偉い大膽不敵の振舞をやりました。然うかと思ひますと、秀吉と和睦してから後は、一意専心秀吉に忍耐服従して、八州の大守大納言の高官の身を以て、尙秀吉の草履まで直しました。虎にして猫、猫にして虎、爰に家康の面目と云ふか、眞相と云ふか、横着さど、謹嚴さが見られます。家康が天下を取つたのは、一つは長命の爲めもありますが、一つは此の……鳴かずんば鳴くまで待たう時鳥……忍耐の力と根氣の好かつたところにもあります。人の成功は、運と根と鈍にある、といふ諺がありますが、家康も亦、運の好い、根の強い、鈍なところのある、三拍子そろつた人でありませぬ。尙言へば、一面から見れば、爪に火を點して、鏡を溜めた、けちんばおやち、一面から見れば、あるだけの資本を擲つて、一六勝負を試みる、相場師のやうな男であります。家康が坐輿的に、大膽不敵の意思を吐露した、面白い話があります。

秀吉の咄しの者である、曾呂利新左衛門と阪内某の兩人が、或る夜家康の屋敷へ夜話に出て、いろ／＼の話の序で「大黒を福神と祀りながら、福神の理を知る者が尠い、」と言出しました。家康之を聞いて「其理は」と尋ねたところ、曾呂利答へて「然れば、大黒は眉を高く作り、其上に縁の出た頭巾を冠つてをりますが、是が大黒の極意かと存知ます。其仔細は、眉を高く作つて其上に頭巾を冠つてをりますれば、上を見る事が出来ませぬ故、奢りの心もなく、分を守る事が出来て、自然と幸ひを

得るといふ意を、形に顯はしたものと存知する。」と云つた。家康點頭いて「一段尤もの事である、昔より、うへをみな、みのほごをしれと云ふ、五字七字の教がある。貴賤ともに分を全うして、幸ひを得る。傳教大師の歌に……うへな見を身の程を知れ人なみにあるべきやうに時にしたがへ……とよまれてある。併し兩人、大黒に今一段上の心があり、是が大黒の極意であるが、其方共當て、見よ、」と云ひ出した。兩人暫く思案して「私共には分りかねますが、一段上の心とは、如何やうなる儀にござりまするか、」と尋ねると、家康笑つて「大黒が常に上を見ないのは、肝要の時に其頭巾を脱いで、一度上を見る爲めで、是が極意である。假令ば侍は常に腰刀を磨き研いで、能く刃を附け、鞘走らぬやうに詰めをして、持つてゐるのは、肝要の時に抜いて人を斬る爲めである。猶言へば侍が常に命を全うして、身を大切にすることも、一大事の場合に捨る爲めであつて、長生きをする爲めではない。腰刀も一代抜ぬものならば、菜切庖丁にも劣る。大黒の頭巾も其通り、只冠つて上を見ないばかりでなく、脱いで一度上を見るのが、大黒の極意である。」と云はれたので、兩人感心して退出したといふことである。あの遠慮深い忍耐強い家康が、秀吉の咄しの者である、曾呂利、阪内の兩人に向つて、此話をして聞かせたのは、彼等をして、大黒の頭巾にこと寄せて、己が肝要の時の極意を知らせる爲めか、とにかく家康に忍耐の外、否以上に、大膽不敵の意思のある事が窺はれて、おもしろい話であります。

#### 油断大敵

手習は阪に車をおす如く油断をするにあつてもござんぞ……といふ道歌があります。が、手習ひばかりではありません。何事でも何業でも、油断をすればすぐ迹へ戻ります。時々新聞に、百萬長者が一

文無しになつて、猫いらすを飲んで死んだなどといふ、記事を見かけますが、今日經濟界の變動が激しい爲めにも、言へば云へませうが、一つは其人に、己は百萬長者だといふ、安心 否油断があつたからでありませう、油断は實に大敵です。さすが「其既に志を得るに及んでや、」と添書して、油断大敵の訓誡を遺しただけあつて、七十五年の長い家康の生涯の間に、油断といふものは微塵もありません。幼年の時代から青年の時代まで、今川家に人質の間も、少しも油断なく、義元の伯父の、臨濟寺の雪齋長老に就いて、兵法文學を學びました。三河一國を切り従へても、駿遠參の三ヶ國を領しても、關八州の太守に成つても、尙進んで天下を取つても、決して油断はいたしません。その例證の重なるヶ條を擧ぐれば、東海道の弓取と云はれ、信玄に恐れられても、信長に信じられても、油断しませんでした。秀吉と和睦して、徳川殿々々と尊敬されても、ますく油断しませんでした。天下分け目とも云ふべき、關ヶ原の大合戦に勝つた時も、諸大將が續々祝賀を陳べに來るのを見ながら、脱いでおいた兜を取て戴き、壁く緒を締めました。近習の者が怪んで「戦ひは思ふまゝの勝利を得ましたのに、殿には何故兜を召さるゝか、」と問ふたら「馬鹿者、勝て兜の緒を締めよの誠めを忘れたか」と、叱つたといふ話が残つてをります。猶、大阪城と共に豊臣氏は没落して、天下は全く徳川氏に歸し、而も二代將軍秀忠は、謹厚着實にして、保守の任に適するにも拘らず、今や息を引取るに臨んで、秀忠に對ひ「天下を如何に思ふぞ」と問ひ、「今にも戦亂が起るやに存知まする、」と云ふ、返答を聽いて「ウム、可し」と云つて、始めて目を瞑つたと云ふ事でありませう。その代り家康はその心を以て、家來はもとより、最愛の妻にも子にも油断がなかつたので、二代將軍秀忠の如き、父家康の目を瞑るまで、戦々競々、晝夜安心する間が無つたと云ふことでもあります。

忍耐。大膽不敵。油斷大敵。

語は極めて簡短であります。家康は此の三語を奉じて、否躰験して、天下を取り、幕府を建て、三百年太平の基を開きました。約めて言へば家康は、忍耐の人、大膽の人、油斷をせぬ人、即ち智の人、意の人でありましたが、情には缺けた處があり、人間味の乏しい人でありました。夫故天下を取りました。日本を治めました。けれども秀吉程の人氣はありません。維新の際に、尊王の志士の爲めに、既に日光廟を破壊、焼却されやうとしたのも、一つはそれが爲めでありました。終に一言を繰返しますが……忍耐。大膽不敵。油斷大敵……此の三語は、徳川家康の自叙傳とも云ふべきものであります。次に家康の遺訓、即ち東照神君御遺訓に就いて、簡短に述べます。此の遺訓は後人の偽作だといふ説がありますが、併し、一語一句、悉く家康の躰験から出た感じがあります。

人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如しいそぐべからず。實に名言であります。家康の一生は、全く此の語の如く、重い荷を負ふて、遠い道を、いそがすあはてず、徐々と進んで、遂に目的の地に達し、即ち天下を取つたのであります。此の家康の教へに従ひ、此の家康の行ひに學んで、専心に従事するならば、如何なる事業でも、必ず成就いたします。不自由を常と思へば不足なく。

人間は元來不自由なものと思へば、決して不足は起りません。併し是はなか／＼むづかしい事ではありません。家康は幼年の時から、今川家に人質に取られて、あらゆる不自由を忍んで育つた。それを忘れないで、不足の心を抑え、不自由を常として、彼の大事業を成就した人であります。心に望おこらば——困窮しつる時を思ひ出すべし。

人間は少し立身成功すると、すぐに贅澤がしたくなります。此の贅澤がやがて衰亡の基になりますから、困窮と戦つて奮闘した時を、いつまでも忘れないやうにしなければなりません。家康は關八州の大守と成り、江戸城を築きましたが、その普請は、堅牢を第一にして、華美を省き、表玄關の敷臺に船板を用ひたさうであります。どこまでも困窮の昔を忘れなかつた人であります。

堪忍は無事長久の基

堪忍は即ち忍耐——忍耐については、前に屢々申し述べましたから、爰では畧します。

いかりは敵とおもへ、

怒りは事を破るの基、實に人間の最大敵でありますから、慎しまねばなりません。家康も大に怒るべき時には、大膽不敵の振舞もいたしましたが、それはこゝぞといふ、大事の場合だけであります。小さな憤りは、あくまで耐忍し、遂に志を得て、天下を取りました。

勝つ事ばかり知つて負くる事を知らざれば害その身に及ぶ

此語は、戦國時代の武將として、遺したのでありますから、戦争の勝負に就いて訓へられました。平和の事業も同じ事です。好い時の事ばかり思つて、悪い時の事を考へなければ、その人の事業が保てないばかりか、その身を全うする事も出来ません。戦争の上から申しますれば、武田勝頼などは、實に好い手本であります。家康は勝頼の滅亡を見て、深く感じたあまり、此語を遺したのであります。

おのれを責めて人を責めるな

人間といふものは、自分勝手なもので、とかく自分をかばふて、人を責めたがるもので、この家康

の訓に従つて、おのれを責めて、人を責めない人になれば、實に上乘の人であります。家康も常に此事に心を用ひた人で、彼が天下を取つたのも、一つは是が爲めでありませう。その大敵である、石田三成さへも、責めず之を容れてゐたのも、その一例であります。

及ばざるは過ぎたるより勝れり

少し才のある者は、さかく出過ぎるものでありますが、それが爲め人に憎まれる。愛ひがありません。家康は常に沈重の態度を取り、晩年彼程の位置に進み、秀吉からも重んじられてゐたにも拘らず、容易に意見を述べることをいたしません。此保身の工夫の上から、過ぎたるは猶及ばざるが如しの、孔子の語を一層適切に、及ばざるは過ぎたるよりは勝れり、と言ひ直したのであります。

以上述べ來りました、三大英雄の遺訓の評釋は、極めて蕪雜であります。是に因て、今日平和の戰爭を以て、對峙する世界の一大強國、日本の戦士である諸君のお耳を通して、その勇猛心を助長する、一端ともなりますれば、私の大慶この上はありません（をばり）

### 本書の發行に就て

本書は、大阪市内の安田關係會社、銀行員中の、有志を以て組織せる、「智惠の輪會」例會席上に於て、浪華文壇の耆宿にして、操觚界の先覺者たる、宇田川文海先生の『三大英雄（信長、秀吉、家康）の遺訓』と題して、講演せられたるものを、更に先生が御老軀をも厭はせ給はず、本會の爲め特に自ら補筆校訂の勞を執られたるものなり、而して先生も亦素より立志傳中の人に在らせらるゝを以て、その御經歷は必ずや吾人の、依て以て範と爲すに足るべきものあるを信じ、特に自叙傳の執筆を乞ひ、併せて巻尾に附する事とせり。

本書固より片々たる小冊子に過ぎざるも、篇中録するところ皆是れ金玉の文字、須らく吾人日常行藏の間、以て處世の要諦と爲し、以て座右の銘とし、公私に適用して人格修養の規準たらしむるを得ば、豈獨り吾人の幸のみならんや。

表紙の題號は、畏友竹原商店員三原愛山氏の、特志揮毫にかゝる所にして、本書出版に關しては、安田銀行大阪支店長濱田勇三氏、及び穴戸養二、七原高治、樋口哲四郎諸兄及び關係銀行會社幹部諸氏の、援助を賜はりたる事多し。茲に誌して以て著者宇田川先生及び諸氏に感謝の意を表す。

大正丙寅晚秋

「智惠の輪會」幹事

吉田 万治郎



お望に任せてをこがましくも私の小傳を叙べます

演者 宇田川文海

私は嘉永元年、江戸本郷新町屋（今の本郷區新花町）の、一商家の三男に生まれました。出生の日が天一天上であつたので、祖父が此子は定めて吉からふと、前途を祝ふて、定吉といふ名を付けてくれました。七歳から九歳まで、足かけ三年寺子屋に通つて、讀書習字、算術を學びました。九歳の年の冬、大傳馬町の馬籠といふ、幕府の郵便御用名主を兼ねてゐる家へ、丁稚奉公にやられました。翌年の夏病氣で家に歸り、其年の秋、市ヶ谷の小管といふ、尾張家の御用達の家に、二度目の奉公にやられました。其年に母を喪ひ、其翌年に父を無くし、一家分散、孤兒も同様の身の上になりました。小管の主人は慈悲深い人で、私が本讀む事が好きで、身体の弱いのを見て、お前は町人には不向きだから、醫者か出家か、どちらかに成る方が宜からう、好きな方に世話をしてくれ、親切に勤めてくれましたので、私は出家の方を望みました。さうしたら、駒込の養源寺（禪宗）の惠舜和尚の弟子にしてくれまして、十二の年に出家得度いたし、師匠の名の一字を分けて、法名を惠海（後に文海と改む）と附けられました。師匠の惠舜和尚は政治經濟にも長じ、公武合体論者でありまして、檀家であつて、時の幕府の老中であつた、稻葉濃州の内命を受けて、盛んに奔走しました。夫が爲め反對黨の憎悪を受け、文久元年七月のある夜、彼等の爲めに途中で暗殺され、供をしてゐたので、私は眞傷して生れもつかぬ不具者になりました。其後は容貌の醜いのを羞ぢて、養源寺の寺内に閉籠り、文選字引と首引きに、有合せた書物を濫讀して七年の永の歲月を空しく送り、慶應の四年二十歳の時、養源寺の末寺の、下總結城の華藏寺の住持に成り、久しぶりに養源寺の門を出て、結城の華藏寺に至り、一院の住持として、寺務を執りましたが、間もなく世に王政維新となり、廢佛毀釋の説が盛んに行はれて、寺院と僧侶は大打撃を蒙り、華藏寺も亦、朱印地は取上げられ、寺内は狭められ、立て行く事が出来なくなりました。私は憤慨の餘り、兄の文則に寺を譲り、冒險にも此の不具虚弱の身を以て、明治三年十二月、着のみ着のまゝの衣裳で、僅に一兩二分の金を懐ろにし、折しも降りしきる大雪を、から傘一本で凌ぎ、笠重吳天雪、鞋芳楚地花の、古詩を朗誦しながら、飄然として結城を去り

東京に出ました。其後の困難は實に言語道斷。果は谷中の或る家の二疊敷の小間を借り、大學東校の學生の寫字をして、漸く其日を送つてをりました。然るに或る日のこと、多年音信不通であつた、兄の茂中貞次が、思ひがけなくも尋ねて来て、其後は長崎に居り前も活版の職工に成るが宜いと勧められ、地獄で佛に逢ひ、渡りて舟を得た喜び、早速文部省活版所に雇はれ、兄の茂中に就て印刷の術を學び、やがて一人前の職工になり、二十六の時、即ち明治六年の秋、秋田縣御用の活版所の、職工長と、同所で發行される、選選新聞の主筆を兼て、二ヶ年の約束で秋田へ出張し同所で働いてゐる間に、中村正直先生翻譯の、西國立志編（自助論）を讀んで、「天は自ら助くる者を助く」の語と、福澤諭吉先生著の、學問のすゝめ、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の語と、此の二語に感激して、獨立自助の精神を奮起し。其後兄の茂中が發行せる、神戸港新聞（神戸に於ける日刊新聞の元祖）に筆を執り、又、茂中と相談して大阪に出で明治九年に、大阪最初の日刊新聞漢華新聞を發行しましたが、私共の力が足らず、時が早過ぎたので、漢華新聞は、十一年に廢刊しました。其後は雜報場で發行された大阪新聞、京町廻で發行された實生新聞、西川甫君が發行した大阪日報、津田貞君の發行した、魁新聞等に筆を執り、魁新聞廢刊の後、朝日新聞に筆を執る事五年、一時去つて、日本繪入新聞を發行し、後又再び朝日新聞社に入り、筆を執る事更に五年。辭して、毎日新聞社に入り、筆を執る事十年、同社を辭して後は獨立して著述と講演に従事し、今に及んでゐるのであります。朝日、毎日、東雲、關西、其他東京、神戸、京都、名古屋、廣島等、各地方の新聞に、小説を書く事數百篇、金港堂、博文館、春陽堂、岡島書店、駈々堂の各書肆より、小冊子は數十冊發行しましたが、著作といふ程のものはありません。喜壽の賀會を開いた時、喜壽記念を一冊發行し、豊國神社々務所の講演、豊公事蹟の筆記（少青年時代の豊太閤）は、只今印刷中であります。

何を身おのいたづらに老ぬらん

年のおもはんこもやさしく

此の古人の歌は、さりもなほさす私の述懐であります。私は今年七十九歳になります。

（おはり）

310  
350

大正十五年十一月卅日印刷  
大正十五年十二月十日發行

『大英雄の遺訓』 奥付  
(非賣品)

不許  
複製

著作兼  
發行者

宇田川文海

印刷者

吉武右近  
大阪市北區梅ヶ枝町廿五番地

發行所

智惠の輪會  
大阪市北區若松町廿四番地 吉田万治郎方

(十字堂印刷所印刷)  
(電話二七六四番)

終